http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.308　14/01/08

寒中見舞い

「あけまして…」と書くのが普通だろうが、ご存じのように我が家は喪中なので、代わりに「寒中お見舞い申し上げます」である。

この「寒中見舞い」の「寒中」だが、二十四節気の「小寒(しょうかん)」と「大寒(だいかん)」の間にあたる期間を指す。よって、松の内（正月の飾りをする期間で、一般に７日まで）が過ぎてから、「大寒」の最後の日である「節分」までの間に、寒中見舞いは出すものなのだそうだ。ちょうど今日８日は松の内も明けていて、この通信にも使えるというわけである。

…てなことを、今回の喪中から学んだ。お恥ずかしい話だが、「しきたり」みたいなことに私はまったく疎くて、こういう機会に身につけていくことになるのである。

＊

私の祖父は、私が４歳くらいの時に亡くなった。ということは、年末に亡くなった私の父は、それ以来ずっと我が家の「当主」だったわけである…と、こう書いても、君たちには今一つピンと来ないかも知れないが、父には二人の弟と一人の妹（私の叔父と叔母）がいたので、父はその三人の弟妹の父親代わりとして、結婚式を出したり、すでに亡くなった弟二人の葬式の世話をしたり、祖父母の供養をしたりと、その手のこと一切を取り仕切ってきたことになるのである。

今回葬儀を出してみて思うことは、こういう人生の節目節目のしきたりに則った儀式というものは、かなり神経を使う厄介なこと、つまりエネルギーを必要とする行事だということである。だから、自分の仕事を持ち、家族を持ちながら、こういう面倒なことに対して長年気を配り続けてきた父は、やはり大した存在だったのだと改めて気づかされずにはいられなかった。

＊

年を取ると、色々な人が立派に見えてくるものだ。これは、年を取ると涙もろくなるのと同じかも知れない。つまり、様々な経験を重ねてきたことで、未知の相手の一見取るに足らぬように見える行動の本当の意味や、ちょっとした心遣いの大切さといったことが、少しずつでも理解できるようなって、それにつけても「あの人は立派だ、決して自分にはああいうことはできないだろう…」とか、「こういう場面では、きっとこういう気持ちになるに違いない…」ということが分かってくるのである。

無限の未来を持つ君たち、それも日比谷生としてのプライドを持っている君たちには、それ故に逆に見えなくなっている事があるに違いない（かくいう私もそういうことを常々反省させられるわけだが…）。自分が属する世界とは異なる世界に生きる人々、自分が志望する分野とは関係のない世界で努力する方々、そういう様々な存在によって社会が成り立ち、今の自分の安寧が保たれているのだということに対する想像力を、決して失わないようにしたいものである。

そして、最も身近で君たちを見守り気遣ってくれているのが家族である。その家族の思いが、ぜひ「見えてくる」ようになってほしいものだと思う。

そんなことを、この休みの間に考えた。